

■ 学位論文要旨 (修士)

現代社会において宗教が担いうる 医療人類学的可能性について

—幸福の主観的認知から考える—

木村 優里

(京都女子大学大学院研修者)

本論文は幸福研究の歴史的潮流及び現状を踏まえたうえで、現代若年層のメンタルヘルス問題を主観的幸福／不幸という側面から検討し、若年層に急増する自殺や現代型うつ病などの問題について、精神病理学的、医療人類学的に考察したものである。

現代日本人が物質的に豊かな暮らしを享受していることは周知の事実といえよう。しかし我が国の自殺率は絶対的貧困の国を含む国別ランキングにおいてワースト6位と深刻であり、特に若年層の死因における自殺の割合は半数近くにも及んでいる。これは先進国の中では極めて高水準であり、憂慮すべき事態となっている。また学校や職場でのいじめや「カースト」問題が注目されており、若者に急増するディスチミア親和型うつ（現代型うつ）はこれらの社会的問題と無関係とは言えない。現代日本の若年層に慢性的な不全感や不幸感を抱えているものが少なくないことは、既に精神保健領域の先行研究が示すところである。

心理学や社会学領域において1980年代以降、幸福を計量化する研究が盛んに行われてきた。中でもエド・ディーナーの研究はこれらの端緒となるものであり、彼の「人生満足尺度」は幸福感の尺度として現在においても多くの研究で活用されている。欧米での計量的研究に続き、我が国においてもこの20年の間に主観的幸福感に關与する諸変数を扱った複数の記述統計学的研究が行われてきた。これらの研究により明らかにされたことは、幸福感は個人の置かれる環境などの外的条件により大きく変動するという点であった。しかし2010年以降になると、外的条件が同じであっても

個人の内的条件、その中でも特に個人の信仰が幸福感に大きく影響していると指摘する国内外の研究が相次ぎ、同趣旨のEllisonらの研究が再評価されるに至った。またGallup World Poll調査では、信仰心があつく礼拝や儀式にもよく参加する人の幸福感がそうでない人よりも高いことが明らかにされた。

一方で現在、日本における宗教信者の割合は低く、宗教は異質なものとして捉えられる風潮さえある。統計数理研究所が2013年に行った「日本人の国民性調査」によると、宗教を信仰する人の割合は高齢者に偏っており、70歳以上で44%、60代では31%、50代では25%、30代40代では20%、20代のみでは13%と世代を追うごとに宗教人口は低下している。では、宗教が希薄化していく現代若年層において、彼らの幸福感のあり方はどのように変化してきているのであろうか。本論文では幸福研究の歴史的潮流と宗教とメンタルヘルスについての先行研究を踏まえたうえで独自に量的また質的調査を行い、現代若年層における宗教と幸福の主観的認知の關連について明らかにすることとした。以下、各章の概要を示す。

第1章では幸福研究の歴史的潮流を概観したうえで、幸福を快楽や満足の総和で捉える近代以降の快楽主義・功利主義的な幸福論とそれに沿った1980年代以降の計量的幸福研究における問題点を指摘した。また2010年頃より多くの実証研究で宗教信仰が主観的幸福に寄与すると報告されていることに触れ、現代日本における宗教の希薄化と価値体系の変化とを關連付けながら現代若年層のメンタルヘルス問題に纏わる病因論的な問いを立て

た。

第2章では宗教が古来より担ってきた医療、特に精神保健的側面について国内外の医療人類学的研究から明らかにした。宗教は癒しやレジリエンス効果のみならず、死を通して生を意味づける機能を持っていたことを指摘し、世代を追うごとに宗教人口が低下する現代日本において、若年層の価値観や幸福の主観的認知がどのように変化しているのか、またそれに伴い若者のメンタルヘルス上にどのような問題が浮上してきているのかを先行研究に依拠しながら考察した。

第3章では若年層を対象に行った主観的幸福に関する記述統計学的研究の結果から、無宗教群では宗教信者群よりも日常生活上の極めて多くの項目が幸福感に影響し主観的幸福が容易に変動しやすいこと、主観的幸福の平均値が僅かながら低いことを指摘した。また生活に関する諸項目をマズローの5つの欲求階層にグループ化して独立変数として扱い、各宗教信者群及び無宗教者群それぞれで主観的幸福度を従属変数とした重回帰分析を行った結果、宗教の有無やその種類が個人の主観的幸福の認知に影響していること、特に無宗教者群では承認欲求の充足が主観的幸福に大きく寄与していることを明らかにした。この章ではEBM (Evidence-Based Medicine) 研究の結果に基づき、若年層におけるメンタルヘルスの問題を精神病理学的に考察した。

第4章では医療人類学的なアプローチとして行ったNBM (Narrative-Based Medicine) 研究の結果を分析した。若年女性無宗教者2事例の「語り」から、同じ無宗教者にあっても身近な親族の死を経験した者は、死への直面化によって生をどのように過ごしたいかという俯瞰的視座が形成され主観的幸福感が浮沈しにくくなっていることを、先行する実証研究の結果と照らし合わせながら考察した。

第5章では結論として、死生の意味づけを行ってきた宗教が希薄化し、さらに核家族化や「死の医療化」による看取りの減少といった今日的状況の中で、生の意味が不鮮明化し即時充足的価値観への移行が起こっていることを医療人類学的な視点から考察した。経済のグローバル化や高度情報

化によって人々の欲望は拡大傾向にあるが、充足しきれない欲求の累積は人々の心を蝕み、その結果現代若年層の精神病理には深刻な問題が生じている。健やかに生きるためには、現代若年層が主体的に「何をもって足りるか」を問い直し、新しい価値体系を創出する必要があるだろう。またその際に改めて既存の宗教や死生観の意味が問われることになるだろう。